

「出宮人」と李賀の詩

一五六

齋藤 功

一

李賀に「謠俗」という詩がある。

上林胡蝶小、試伴漢家春、飛向南城去、誤落石榴裙、脉脉花滿樹、
翾翾燕遶雲、出門不識路、羞問陌頭人、

唐末に書かれた『北里志』は、

諸女或自幼丐育、或備其下里貧家。常有不調之徒、潛爲漁獵。亦有良家子、爲其家聘之、以轉求厚賂。誤陷其中、則無以自脫。初教之歌令而責之。其賦甚急、微涉退怠、則鞭朴備至。

寓喩的な詩である。「謠俗」という詩題は古曲の名である可能性を残すものの、ここは風俗を謠うと解してよいだろう。したがって、「上林」は漢の上林苑だが、當代の風俗を詠じたとすればむしろ唐の御苑のことで、「漢家」も唐の皇帝を指す。その御苑に飛ぶ小さな「胡蝶」とは、まだあどけなさを残している宮人をいうのであろう。「試みに伴ふ」という皇帝の寵は氣紛れなものでしかなく、その「胡蝶」が「南城」に飛び去り、「誤って石榴裙に落」ちたという。「南城」は南陌と同意と考えてよく、娼家立ち並ぶ繁華の街路を言う。「石榴裙」は、もと舞衣に用いられる鮮やかな紅色の裙であったが、「眉黛奪將す萱草の色、紅裙妬殺す石榴の花」(萬楚「五日妓を觀る」)と詠まれるように、妓女の着衣を言い、さらに妓女そのものをも指すようになったようだ。つまり、少女のところに宮中に連れて來られて、宮中のこと以外に何も知るべくもない宮人が、突然に柳暗花明の巷に放り出されたというのである。「誤落」という語が、運命の急變や惡所への轉落を暗示している。

というほどの略記ながら、「誤りて其の中に陥れば、則ち以て自ら脱する無く」、鞭を以て伎藝を教え込まれる妓館の妓女の過酷な境遇を傳えている。至尊に仕えていた宮人が妓女に「誤落」することは、世間的に見て身分に雲泥の差が生じることである。並木に花咲き燕飛び回る殷賑の路頭で、一人戸惑うその様態は見るからに傷ましい。この詩の「胡蝶」は、もと宮中に伺候していたが、市井の街巷に「誤って落ち」た宮人である。そして、李賀は風俗と言えらるほどこうした女を街中で目にすることが多かったであろう。では、これはどういう事情によって起こった風俗なのだろうか。

葉葱奇『李賀詩集』は「謠俗」について、「名位低微的宮女被遣放出宮。『誤落石榴裙』、猶言誤著紅裙、卽誤被遣嫁的意思。」と註釋を加え、さらに、『資治通鑑』(卷237)の元和四年(八〇九)閏三月の記事「租税を蠲せられたと解するのはやや的是はずれの感があるが、「胡蝶」を宮中から放

出された女としている点には注目すべきである。

二

宮廷外とは身内との面會さえ制限されていた宮人が、宮中から出るということはほとんどなかった。^⑥ 例外的には次の教坊の女樂のように、

城東有薛王別墅、林亭幽邃、甲於都邑、特以賜之、及女樂二部、天下珍玩、前後賜與、不可勝紀。

〔舊唐書〕卷106、李林甫傳

賜永崇里第及涇陽上田、延平門之林園、女樂八人。

〔舊唐書〕卷133、李晟傳

と寵臣や功臣に下賜されて宮中を出ることがあり、また、同じ教坊の女樂でも、白居易の「琵琶引」に見える琵琶弾きの女のように、「十三琵琶を學び得て成り、名は教坊第一部に屬し」ていたが、「年長け色衰へ、身を委ねて賈人の婦と爲る」(同序)ごとく、老いて免ぜられる者もいた。

あるいは、安史の大亂による蒙塵によつて多くの宮人が否應なしに宮中を離れざるを得なくなつたこともあつた。この時などは妓女に「誤落」した者も少なくはなかつただろうが、李賀の生きた貞元・元和のころには、「白頭涙を垂れて梨園を話す、五十年前雨露の恩」(白居易「梨園弟子」)というように、その宮人はすでにみな老境に入つてゐる。

これらは「誤落」して妓女の境涯となつたうら若い「胡蝶」とは比すべくもない。葉葱奇の註にあつたように、「胡蝶」は宮中から放出された女であると考えるのが自然であろう。

唐代を通じて、一度に百人、千人単位で宮人を解放する「出宮人」と呼ばれる政策上の措置がとられた。『唐會要』第一、二卷が「帝號」「追

諡皇帝」について書くのに續いて、第三卷は「皇后」「内職」とともに「出宮人」の一項を立てている。これを見ても、「出宮人」が唐代の後宮關係について述べるに不可缺の事項と認められていたと言えるだろう。この「出宮人」については、鄭華達氏の「唐代宮人釋放問題初探」に丹念な調査があり、宮人の數が萬を以て計えるほどであつたことをはじめ、宮人放出が高祖から懿宗に至るまで三十回に及んでいる點を示すとともに、その原因を「釋宮人以省國用」、「放宮人以彰仁政」、「歸宮人以應水旱」の三點にまとめて論じている。

試みに李賀のころの事例を示す。元和四年(八〇九)三月、左拾遺白居易が翰林學士李絳とともに「後宮の内人を揀放せんことを請ふ」狀を奏上した。

右、伏見大歷已來四十餘載、宮中人數稍久漸多。伏慮驅使之餘、其數猶廣。上則虛給衣食、有供億糜費之煩、下則離隔親族、有幽閉怨曠之苦。事宜省費、物貴遂情。……臣伏見太宗・玄宗已來、每遇災旱、多有揀放、書在國史、天下稱之。伏望聖慈、再加處分、則盛明之德、可動天心、感悅之情、必致和氣。光垂史冊、美繼祖宗、貞觀・開元之風、復見於今日矣……。(『白氏長慶集』卷41)

この早害は前年から續いていた。上奏文によれば、まず「驅使之餘」である無用の宮人が多いために、その宮人たちに衣食を給して宮中に留めておく費用が煩多であるとする。また、宮人は「親族に離隔せられ幽閉怨曠の苦有る」狀況であると述べ、さらに、「太宗・玄宗已來、災旱に遇ふ毎に、揀放有ること多し」という前例があり、そうすることによつて「盛明の德、天心を動かすべく、感悅の情、必ず和氣を致さん」が故に早害は解決され、天子の光輝は後世に垂れ、祖宗の美風を繼ぐことに

なるであろうと言う。以上、確かに白居易の上奏文を見ても、鄭氏の指摘する三つの理由によって「出宮人」が執り行われていた。

三

樂府「怨歌行」「長門怨」以來の宮怨詩や白居易の新樂府「上陽白髮人」に歌われている苦惱、すなわち、失寵とその後の長い幽閉下での懊惱は想像するに餘りある。また、妓館の妓女と同様の「以て自ら脱する無き」境遇の果てに、宮中に幽閉されたまま朽ち果てるとなると悲惨の極みである。

むろん李賀もまた宮中に幽閉されている宮人たちを思い遣る詩を作っている。

宮娃歌

蠟光高懸照紗空、花房夜擣紅守宮、象口吹香氈毳暖、七星挂城聞漏板、
寒人罽毼殿影昏、彩鸞簾額著霜痕、啼蛄弔月鉤欄下、屈膝銅鋪鑣阿甄、
夢人家門上沙渚、天河落落處長洲路、願君光明如太陽、放妾騎魚撒波去、

美しい光彩がかえって夜の宮房の悽愴とした空虚さを際立たせ、それが五感を通して迫ってくる描寫は李賀ならではの、深い憂愁を湛えた詩である。この美しい宮人はただ金具の付いた扉で閉ざされているばかりではなく、「夜擣紅守宮」に見られるように性的に厳しい管理下に置かれていた。ある夜、宮人は(李賀もそうであったように)夢で故郷へ歸り、懐かしい砂の渚に降り立った。そこは水の豊かな呉の長洲、「天河の落つる處」。夢さめればもういてもたってもいられない。どうか君の太陽のような「光明」でもって、「妾を放ちて魚に騎して波を撒ちて去らしめんこ

とを」と訴える。波を撃つて泳ぐ魚に騎すとは、水郷の故郷にまつわる縁語的な表現であるばかりではない。一刻も早く歸りたいとの思いの表れである。叶わぬ事であるだけに、いつそう歸心がつるのである。

さて、「出宮人」は、そうした宮人を解放する政策であるから、「仁政」として衆庶に歓迎されたと史書が傳えているのもうなずける。

貞元二十一年三月、出後宮人三百人、其月、又出後宮及教坊女妓六百人、聽其親戚迎於九僊門、百姓莫不叫呼大喜。(『唐會要』卷3)
放出された宮人は「其の親族を召して之に歸せしむ。」(『舊唐書』卷14、順宗紀)というだけでなく、

宜放內人三千、各任其嫁、其年老及疾患、如無近親收養、散配諸寺安置。待有去處、一任東西。仍各與一房資財、以充糧用、並委府縣官勾當、勿使侵凌、以成朕無爲之化也。(『全唐文』卷42、肅宗、放宮人詔)

と記するごとく、放出後の措置まで懇切に施されており、「百姓叫呼して大喜せざる莫し」という記事もまんざら誇張でもないように受け取られる。

四

中・晩唐になると、王建の「宮詞一百首」に代表される宮詞を初めとして宮人を歌題とする風が強まった。そして、李賀の「謠俗」がそうであったように、この「出宮人」という「俗」について言及する詩も作られた。晩唐の項斯に「舊宮人」という詩がある。

自出先皇玉殿中、衣裳不更染深紅、宮釵折盡垂空鬢、內扇穿多減半風、
桃熟亦曾君子賜、酒闌猶候妾歌終、如今還向城邊住、御水東流意不通。

「先皇」の宮廷より出てから「衣裳更に深紅を染めず」、もはや歌舞の業には攜わるまいと思うが、どうしても往時を追憶してしまうよう、下賜の桃や酒宴での歌を思い出す。「城邊に向かひて住む」というのも宮中への未練にはかならない。

同じく晩唐の杜牧に「出宮人」という詩が二首ある。

閑吹玉殿昭華管、醉折梨園縹帶花、十年一夢歸人世、絳縷猶封繫臂紗、
平陽拊背穿馳道、銅雀分香下璧門、幾向綴珠深殿裏、妬拋羞態臥黃昏、

「昭華管」「繫臂紗」「平陽拊背」「璧門」といった典故を驅使して巧みに詠まれているが、歌意は、君王に選ばれた時の得意や黄昏時に覺えた人への嫉妬など、「十年一夢」であつた宮殿での日々を懐古するばかりである。

また、杜牧と親交があつた張祜にも「退宮人」という詩が二首ある。

開元皇帝掌中憐、流落人間二十年、長說承天門上宴、百官樓下拾金錢、
歌喉漸退出宮闈、泣訴伶官上許歸、猶說入時歡聖壽、內人初着五方衣、

兩首ともに王建の宮詞風に具體的に宮廷の様子が描かれている。しかし、詠みぶりは杜牧と同様で、「泣きて伶官に訴へ」て出宮を許されたとはいへ、「開元皇帝」に象徴される盛時の宮中を「長く説き」「猶ほ説き」ながら懐かしんでいるに過ぎない。このように「出宮人」を歌う詩は、

宮詞の様式に化したかときえ見えるような、千篇一律の懐舊的な詩である。

これに對し、李賀の「謠俗」と同じく、路頭を行く「舊宮人」を描く詩がある。李賀と同時代の張籍の「舊宮人」という詩である。

調舞梁州女、歸時白髮生、全家沒蕃地、無處問鄉程、宮錦不傳樣、
御香空記名、一身難自說、愁逐路人行、

「全家蕃地に没す」は、どういう事情でそうなつたのか不可解だが、老いて解放された「調舞」の女には出迎える者も、歸るべき郷里もなかつた。張籍は別に「沒蕃故人」という五律で西域で戦没した故人を哭しており、同様にして家族を失つた「舊宮人」に深い同情を寄せているようである。女は宮廷での優雅な生活を伝える縁もないほどに零落しており、「一身自ら説き難し」と漏らすその言葉には、わが身の轉變を顧みても萬感の思いがこもる。そして、末句の路上での「愁」には、「謠俗」の少女とはまた違つた老殘の嘆きがあるか。この詩などは當時の實情をよく寫しているようで、「舊宮人」の悲運を批判的に歌っている類例の少ない詩である。

史書には「出宮人」が人々から勸迎されたかに書かれていたが、李賀の「謠俗」に歌われた「胡蝶」のように妓女に身を落とす者や、張籍の「舊宮人」のごとく老いて歸るに家なしという女もいた。いや風俗となるほどである、決して少ない數ではなかつたのであろう。この「謠俗」という詩題について、前に「謠ふ」と訓じたが、あるいは、「謠る」とも解釋できる。『楚辭』（離騷）の「衆女余の蛾眉を嫉み、謠諑して余を謂ふに善淫を以てす。」に王逸が「謠は謂ひ毀るなり。」と註しているところから、『楚辭』に學ぶところの深かつた李賀は、當時の風俗に對して、あ

るいはその起因となる「出宮人」という政策に對して、我慢ならぬものを感じて作詩に至ったのではないかという推測もできるのである。

五

さて、前述の鄭氏は同論文で、「出宮人」の詔が三十回中十四回「天子即位初年」に下されており、その中の十三回は「新登天子行仁政、重徳不重色之擧」を世に示すために行われたと指摘している。試みに、武徳九年（六二六）の條を擧げると、

八月癸亥、高祖傳位於皇太子、太宗即位於東宮顯徳殿。遣司空魏國公裴寂柴告于南郊。大赦天下。武徳元年以來 責情流配者並放還。文武官五品已上先無爵者賜爵一級、六品已下加勳一轉。天下給復一年。癸酉、放掖庭宮女三千餘人。（『舊唐書』卷2、太宗紀上）

とある。すなわち即位に當たり、大赦を下し、官吏の爵勳を進め、賦租を免ずるといふ新天子の恩徳の一環として「出宮人」が位置づけられている。なにしろ太宗は二月前に玄武門で二人の兄、皇太子李建成、齊王李元吉を殺害して皇位に登ったのであるから、何を置いても人心收攬に努めねばならなかつたはずである。

このように鄭氏の言のとおり「即位初年」における宮人放出は「仁政を行う」ことを標榜していた。だが、徳宗即位の年、大曆十四年（七七九）閏月の詔を見ると、

丁亥、詔文單國所獻舞象三十二、令放荊山之陽、五坊鷹犬皆放之、出宮女百餘人。（『舊唐書』卷12、徳宗紀上）

と、冗費を省減するという「仁政」のために「舞象」や「鷹犬」と同時に「宮女」をも放出するという無神経さで、宮人はあたかも無用の奢侈品扱いである。これが果たして、宮人救済のための「仁政」と言えようか。それはあくまで表向きのことであり、眞の理由は他にあると考えねばならない。次に、鄭氏と同論文により宮人放出の年とその人数を表示する^①。なお、即位の年には○、その前年には※、即位後四年以内であれば△を付した。

君主	年	人数	印
高祖	大業十三年（六一七）		※
同	武徳二年（六一〇）	五百人	△
太宗	武徳九年（六一六）	三千餘人	○
同	貞觀二年（六二八）	三千餘人	△
高宗	即位之初（全唐文による）		○
同	顯慶元年（六五六）		
武后	光宅元年（六八四）		○
中宗	神龍元年（七〇五）	三千人	○
睿宗	景龍四年（七一〇）		○
玄宗	開元二年（七一四）		○
肅宗	乾元元年（七五八）	三千人	△
徳宗	大曆十四年（七七九）	百餘人	○
順宗	貞元二十一年（八〇五）	九百人	○

君主	年	人数	印
憲宗	元和四年（八〇九）		△
同	元和八年（八一三）	二百車	
同	元和十年（八一五）	七十二人	
同	元和十五年（八二〇）		○
穆宗	元和十五年（八二〇）		○
敬宗	長慶四年（八二四）		○
文宗	寶曆二年（八二六）	三千人	○
同	太和元年（八二七）	百人	△
同	太和三年（八二九）	百人	△
同	太和七年（八三三）	千人	
同	開成三年（八三八）	五百五十五人	
宣宗	大中元年（八四七）	五百人	△
同	大中十三年（八五九）		※
懿宗	咸通八年（八六七）	五百人	

これによれば、ほとんどの皇帝が即位前年から即位後四年目までの間に宮人を放出していることがわかる。この期間に執行する所以は、先代の遺した後宮の餘剩人員を整理するためであると考えられる。鄭氏の指摘のように唐王朝は常時數萬の宮人を抱えており、膨大な國費を費やす現状に悲鳴を上げていた。一度に三千人も宮人を放出するという

事態からしても、その深刻さが窺えよう。故に、貞觀二年（六二八）九月の詔に、

今將出之、任求伉儷、非獨以惜費、亦人得各遂其性。（『舊唐書』卷2、太宗紀上）

とあるように、「亦人各其の性を遂ぐるを得しむるなり。」と宮人各人の人間性を尊重するかのような「仁政」を表看板にしているが、「獨り費を惜しむのみに非ず」と、省費が主眼である内幕を問わず語りに語つてしまふのである。すなわち、「出宮人」の根本的な理由は冗費を省くことにあり、それが新帝即位直後に集中するのは先帝が遣した宮人を處分したのがためというのが實態であろう。「先帝の舊宮に宮女在り、亂絲猶ほ挂く鳳皇の釵」（王建「舊宮人」）という詩人の感傷など、政治には入り込む餘地はないのである。

確かに、この「出宮人」は冗費省減、仁政顯彰、災害鎮息のためという、爲政者にとつてはいいことづくめの「仁政」にはちがひなからうが、根本的に後宮という非人間的な制度が運用されている限り、「出宮人」も所詮は臭い物に蓋式のお座なりの措置に過ぎない。故に、いかに「仁政」という美名をもつて飾ろうとも、こうした政治的欺瞞は見え隠れしてしまふ。まして社會矛盾に対して鋭い嗅覺を持つ詩人の李賀は、そうした欺瞞をいち早く嗅ぎつけたにちがひないのだ。

六

李賀に「馮小憐」という詩がある。この詩については、原田憲雄氏の『馮小憐』^①に入念な解釋がなされているが、あえてここで取りあげたの

「出宮人」と李賀の詩

は、この詩に描かれている「馮小憐」もまた、「出宮人」の一人であろうと考えたからである。

灣頭見小憐、請上琵琶絃、破得春風恨、今朝直幾錢、裙垂竹葉帶、鬢濕杏花煙、玉冷紅絲重、齊宮妾駕鞍、

「馮小憐」は北齊の後主の淑妃の名で、「慧黠にして能く琵琶を弾き、歌舞に工なり。後主之に惑ふ。」（『北史』卷14、馮淑妃傳）と伝えられるが、就中、亡國の際に愚昧な君主を惑わせた毒婦として史書に描かれている。

だが、この詩は馮淑妃を歌つたものではない。「灣頭に小憐を見る」とあるように、船着き場あたりに立つて、「請ふ琵琶の絃を上さん、春風の恨みを破り得ば、今朝直ひ幾錢ならん」と道行く人に呼びかけて客を引く女を現に見て、それを「能く琵琶を弾」いたという馮淑妃に見立てたのであろう。路頭に立ち、琵琶の値を「幾錢ならん」と持ちかけるからには、「李娃傳」の李娃のように「百萬を累ぬるに非ずんば、其の志を動かす能はざるなり。」というような高級な遊女でないことは明らかである。さらに、この女は客の興味をそそるような臺詞を口にす。「齊宮に妾鞍に駕しき、昔は宮中で鞍に上つたご身分さ。客を誘う殺し文句であるうか、あるいは質の悪い客への啖呵だったかもしれない。いずれにしても、琵琶の「紅絲」の絃が重たげに見えるほど華奢な女が吐いた「齊宮に妾鞍に駕しき」という言葉は健氣である。もちろん「齊宮」は北齊の淑妃「馮小憐」にちなんだ語として用いたままで、「謠俗」の場合と同様に唐の宮中を指す。劉禹錫に「舊宮人穆氏の歌を唱ふるを聴く」という詩があるごとく、歌舞音曲を生業とする「舊宮人」は當時珍しくなかつたようで、昔は「齊宮に妾鞍に駕し」、今は「灣頭」に立つ「馮小憐」とは、宮中から出た女にまちがひない。

史家が「慧黠」と切り捨てた馮淑妃は、亡國にまつわる人物であるが故に、史書では愚行ばかりが繰り返し描かれる。だが、責めを負うべきは一に淑妃に骨抜きにされた北齊の後主であろう。そして、北齊が滅びると、淑妃は北周の代王達に下賜された。その時、淑妃は「今日の寵を蒙ると雖も、猶ほ昔時の憐を憶ふ、心の斷絶するを知らんと欲せば、應に看るべし膝上の弦を」というしおらしい詩を作り、それによってまた代王達の寵を受けることになる。『北史』で、この後に代王達の妃が淑妃の讒言によって殺されかけた記事が続くところを見ると、この歌は淑妃の「慧黠」な手練から出たものとして載せられているようだ。その歌が本心からなのか詐謀からなのかは明らかにはしえないが、淑妃は亂世に翻弄されながらも、懸命にしたたかに生きたとは言えまいか。

『北里志』に載る「能之」という源氏名の妓女などは「風姿に乏しと雖も、亦甚だ慧黠。」と描かれている。見てくれは良くないがそれを「慧黠」さで補っているという。この言いまわしからすると、「慧黠」であることは妓女にとつて善であり、必要なことであるようだ。さらに、「亦」という一言には「他の多くの妓女と同様に」という意がある。唐代の妓館や路頭にもまた馮淑妃さながらに「慧黠」に生きる女がいたのだ。

詩中の「馮小憐」は、身勝手な政治によつて宮中から出され、「灣頭」に立つ境遇になりながらも、健氣に生きていく舊宮人の一人なのである。李賀はその姿を活寫した。批判めいた言辭は一切用いず、ただ眼前の「馮小憐」を寫し取っているだけでありながら、こうした女を生んだ後宮制度の醜惡さをも浮かび上がらせているのだ。

七

さて、李賀が妻帯していたかどうか論じられる場合に引用されるのが

次の詩である。

出城

雪下桂花稀、啼鳥被彈歸、關水乘驢影、秦風帽帶垂、入鄉試萬里、無印自堪悲、卿卿忍相問、鏡中雙淚姿、

思わぬ妨害があつて進士受験を斷念せざるをえなくなり、歸郷のために長安城を出んとする時の作である。何の官職も得られずに歸える悲しさもさりながら、鏡に映る涙顔の私を見て、あの人が「卿卿」と呼びかけて首尾を尋ねづらそうにするのを見るのも辛いという。この「卿卿」は、『世説新語』の王戎の故事^③に據つて妻が夫を呼ぶ言葉と解するのが習いであり、この語句によつて李賀に妻がいたとも解釋できるのである。だが、杜牧の『李賀集序』が「賀復無家室子弟、得以給養郵問」と記しているのに據れば、生涯妻子は持たなかつたということになる。次に述べるように、郷里に近い洛陽にいる戀人、さらに言えば親密な間柄の妓女とるのが穩當のようである。

『北里志』の著者孫棨の詩が同書に載り、

試共卿卿語笑麤、畫堂連遣侍兒呼、寒肌不耐金如意、白纈爲膏郎有無、^④

とある。これは孫棨が妓女に詩をせがまれて詠んだ三絶句の一つで、その妓女が「自ら述ぶるがごとく」に書いたと記す通り、「卿卿」は、「語笑すること麤なる」、つまりぞんざいな言葉も出るほどに打ち解けた顧客に對しての呼稱として用いられている。他にも、

小疊紅箋書恨字、與奴方便寄卿卿、（韓偓「偶見」）

自恨青樓無近信、不將心事許卿卿、
（溫庭筠「偶題」）

という用例があり、「紅箋」に「恨字」を書いて送るような相手や、「青樓」にやつて来る男に向かつて呼ぶ言葉であり、決して一家の主婦が用いるような言葉ではない。

李賀を「卿卿」と呼ぶ人は、この「出城」詩に登場するだけであり、如何なる人なのかは知り得ない。しかし、尾羽打ち枯らした李賀が足を向ける人であるからには、おそらく李賀にとっては人に言えぬ弱音さえも吐くことができた人なのであろう。そう思うと孤影の濃い李賀の生涯に一筋の光の射す思いがする。だが、その人も、後宮制度の犠牲者たる宮人と同様に自由を奪われた、苦界に身を置く境涯の人なのである。

莫愁曲^⑤

草生龍坡下、鴉噪城堞頭、何人此城裏、城角栽石榴、青絲繫五馬、黃金絡雙牛、白魚駕蓮舫、夜作十里游、歸來無人識、暗上沈香樓、羅牀倚瑤瑟、殘月傾簾鉤、今日權花落、明日桐樹秋、莫負平生意、何名何莫愁、

「石城に女子有り莫愁と名づく。歌謠を善くす。石城樂の和中に復『莫愁』の聲有り、故に歌ひて云ふ」（『舊唐書』卷29、音楽志）と見えるように、「莫愁」は南朝の妓女であり、古辭以來、妓女の代名詞とされた。詩では、妓樓の女が豪華な遊びの後、ただ一人で身の行く末を思いつつ、「平生の意に負くこと莫かれ、何の名ぞ何の莫愁ぞ」と自らを勵ましている姿が描かれる。「莫愁」という遊女らしい享樂的な名も、愁い多き境涯を思えば皮肉で、李賀にはそれがかえって傷ましく感ぜられたのだから。殊にこの詩では、李賀が「何人か此の城裏、城角に石榴を栽えし。」

「出宮人」と李賀の詩

と問うているのに注目したい。前述のとおり「石榴」は妓女を暗示する語である。誰がこの街に妓館を作り、妓女を置いたのかという意であり、どうして妓女などという惨い境遇の人を生ぜしめたのか、と難じているのだ。

李賀が實際に妓女とやりとりする様子を傳えている詩は「花遊曲^⑥」のほかなく、白居易等同時代の詩人たちに比べて極端に数は少ない。しかし、李賀を「卿卿」と呼ぶ人に接しながら、過酷な境遇を「慧黠」に生きていた妓女たちの姿を目の當たりにしていたはずで、「馮小憐」の「齊宮に妾鞍に駕しき」という啖呵ともとれる臺詞の口吻からは、彼女らの生きざまをそのまま寫し取った李賀の確かな目を感じられる。そして、「馮小憐」ら社會的弱者に注ぐこの温かい眼差しこそが李賀の詩のまたとない魅力なのであり、鋭い風刺の淵源となつていたのである。

注

- ① 李賀の詩は『宋宣城本李賀歌詩編』に據つた。
- ② 『文選』（卷18）嵇康、琴賦「下逮謠俗・蔡氏五曲・王昭・楚妃・千里・別鶴。」の李善註に「歌録曰、空侯謠俗行、蓋亦古曲、未詳本末。」とあるが、李周翰註は「謠俗、歌風俗之聲也。」とする。
- ③ 盧照鄰「長安古意」に、「北堂夜夜人如月、南陌朝朝騎似雲、南陌北堂連北里、五劇三條控三市」と見える。
- ④ 叢書集成所收『古今說海』本『孫内翰北里誌』に據る。なお、百卷本『說郛』に據つて書名を「北里志」とし、「諸女自幼丐有」を「諸女或自幼丐育」と改めた。
- ⑤ 「宮人」という名稱は、岸邊成雄『唐代音樂の歴史的研究』（樂制篇上巻）によれば、宮人は天子等に奉仕する掖庭の宮女・女官の總稱であるが、教坊の妓女、梨園の樂女等の宮人以外の樂人も含み、兩者の區別は困難であるという。

⑥ 鄭華達氏『唐代宮怨詩研究』參照。

⑦ 『中華文史論叢』第53所收

⑧ 王建、權德輿、竇鞏、雍裕之、孟遲らの中、晩唐の詩人に、「宮人斜」という宮中で没し葬られた宮人を悼む詩がある。また、杜牧には「宮人塚」がある。

⑨ 『太平御覽』(巻946)引く『博物志』に「蜥蜴或蝮蛇、以器養之、食以朱砂躄盡赤、所食滿七斤擣萬杵、以點女人支躄、終身不滅、故曰守宮。」とあり、また、同巻引く『淮南萬畢術』に「以飾女臂、則生文章、與男子合陰陽、輒滅去。」とある。詳細は原田憲雄氏『李賀歌詩編1』参照。

⑩ 「昭華管」は、『晉書』(巻16、律曆志)「至舜時、西王母獻昭華之瑄、以玉爲之。」に據る。「繫臂紗」は、『晉書』(巻31、胡貴嬪傳)「帝多簡良家子女以充內職、自擇其美者、以絳紗繫臂。」に據る。「平陽拊背」は、『漢書』(巻97、外戚傳孝武衛皇后傳)「(平陽)主因奏子夫送入宮。子夫上車、主拊其背曰、行矣、強飯勉之、卽貴願無相忘。」に據る。「璧門」は、『史記』(巻12、武帝本紀)「於是作建章宮……其南有玉堂・璧門・大鳥之屬。」に據る。

⑪ 鄭氏は、順宗の貞元二十一年(八〇五)二月二十四日、三月一日、三月四日を各一回とし、敬宗の長慶四年(八二四)二月二十一日、三月三日と文宗の開成三年(八三八)六月二十五日、六月二十六日を各一回と數えているが、ここではそれぞれ月日は違っても一聯の施策と考えて、貞元二十一年、長慶四年、開成三年各一回とする。

⑫ 『李賀論考』所收。なお、原田氏は同論文で、「馮小憐」を代宗の皇后沈氏を歌つたものと踏み込んで解釋している。李賀と呉興の沈氏との深い繋がりをおぼやると、街で見かけた「出宮人」に戦亂で行方不明となった沈皇后を想起したとしても不思議ではない。

⑬ 『世說新語』(惑溺)に「王安豐婦常卿安豐、安豐曰、婦人卿壻、於禮爲不敬、後勿復爾。婦曰、親卿愛卿、是以卿卿。我不卿卿、誰當卿卿。遂恒聽之」とある。

⑭ 詩句は『才調集』(巻4)に據った。

⑮ 「謠俗」、「莫愁曲」とともに『李賀歌詩編』の外集に載る。外集は李賀自身が編したとされる四巻以外の逸詩が集められたもので、僞作も混じるとされている。しかし、すでに宋代には『新唐書』(巻60、藝文志)に「李賀集五卷」と見えたとおり、四巻に外集が付いた現在の形になっている。外集の詩も李賀の作として収集され、今に伝えられたものである以上、大切に讀んでいくべきであろう。特に「謠俗」・「莫愁曲」は、外集中でも李賀らしい深みがある詩だと思われる。

⑯ 「花遊曲」の序に「寒食日諸王妓遊、賀入座、因採梁簡文帝調賦花遊曲、與妓彈唱。」とある。

(福島縣立會津高等學校教諭)